



# 陽気だより

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

## 第8号 (昭和25年1号) から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返ってまいります。

### まだ見ぬ山崎夫人

にさきご

宇野晴義

の仕事を忙しい日を送っていました。

昭和二十年八月十五日、遂に敗戦の日が来ました。この日から私達上海の居留民は、総て六等国民となりました。それは華人が教えてくれたのです。険悪な空気がただようて来ました。町の様子はガラッと変って、日本商社は何処も看板を下して、戸を固く閉めて、闇の夜を歩むさまよい人の如く、成り行きを待つのみでした。

日本海軍租界部隊へは、美国航空隊（中国系）が進駐し、上海日本憲兵隊本部へは、国民軍の憲兵隊が進駐しました。

しかし、宗教家のみは、さすがに悟りをもっていました。

奥地の日本人は着の身着のままの惨めな姿で、上海に流れて来ます。これを救うために、仏教、基督教の人々と協力して、従来の宗教聯盟に共済会を付設してお世話したのであります。毎日幾百人という気の毒な人々の宿舎、給食、求人、求職など

す。庁員が門を開けると、ローペー（主人）は何処にいるかと聞くので、三階の私の居間に案内してしまいました。

ノックの音に、何心なくドアを開けると、一人の華人が下手な日本語で、

「憲兵隊まで一寸行こう」

「何の用事か」

「行けばわかる」

と云って、寝巻のままの私の腕を握って離さない。致し方なく背広に着がえるとすぐ引張って行くのでした。伝道庁の門を出る時、ハハア、共産軍に協力したという疑いだなど直感しました。

北四川路へ出た。華人はしっかり腕組みをしています。この混乱の時、沢山の邦人は悲惨にも無実の罪を受けています。私は先程から南無天理王命を心に念ずるのみでありました。

今迄、人助けのために私は勤め切つて来たのですから、神様のお試しや、心配はない、と私は考えました。すると、「心を澄み切らせ」と、強く耳許で囁くものがあります。

「私は、何を疑われているのですか」

「行ったらよい」と簡単に返答するのみです。

自分は調べられるわけは一つもない。宗教家は中国の味方である。一生懸命に尽くして来たと思うと、何だか自信がついて、嬉しい心になって来ました。

「私は日本の天理教の教師です。決して嘘をつかない。誰にでも聞いて下さい。もう一度、家に戻ってゆっくり話を聞いてもらいたい。天理教は、御国でどんな働きをして来たか、知らないのですか」

私は一心に話しかけました。ところが不思議なことには、固く組んでいた華人の腕は、突然ゆるんで来るじゃありませんか。「テリチヨ、シヨタ、シヨタ」（よく知っている）

「ホー、ホー、テリチヨ、シン、ホレシ」（真実である）

と話しかけるのです。突然、一種のカンが働きました。

「家に戻って、是非お話ししたい。聞いて欲しいことがあります。そして国民軍にお祝いする意味で、贈物もしたいのです」

今度は、我知らず腕を強く組んで、廻れ右をして元の道に戻りました。華人もそのままついて来るのです。心配していた庁員は、二人の姿を見て、あっけにとられた様子でした。田中勇書記と他の一人とが通訳をして、

天理教の精神を十分伝えてくれるのでした。

「新京（現長春市）の天理教の、山崎さんの奥さんを知っていますか」と問われました。事実、誰のことか知らんが、

「はあ、よく知っています。あの人は傑い人です。あの人は私の教え子です」

私はこんなことが、思わず言えたのです。

「僕が新京で憲兵隊に入隊した時、日本人は誰も下宿させてくれなかったので、困っていました。しかし天理教の山崎さんの奥さんは、心よく引受けて下さって、三年間、我が子のように世話をしてくれました。天理教の人は、実に正直で親切です。僕は山崎さんに大きな恩があります。僕は劉と言います」

コーヒーをすすりながら、本当の自分の姿を出して、流暢な日本語でしみじみと語りつづけるのでした。もう憲兵隊の密偵ではありません。

天理教なら正直であり、共産軍に協力する筈はないと、劉さんは信ずるものようであった。

この奇蹟、この御守護、私は止めどなく感激の涙に咽んだ。

最後に劉さんは、この疑惑を解く方法を、こっそり教えてくれ

た。

た。

私は、床に飾ってある硝子張りの大きな人形を二つ、隊長と劉さんとに贈ることにした。一つは、弁慶の勸進帳の凛々しい姿で、もう一つは、日本独特の美人の像であった。そして、神尾博士一團を以って組織した共済会医療班の活躍の時から引揚げの最後迄、よく交渉を続けて来ました。

北京の山崎の奥さん！ あなたが劉さんを子供のように世話して下さった御蔭で、私は死を

まぬがれました。もしあの時引かれて行ったら、私は冷たい獄舎に繋がれて、いまだに帰って来ていないでしょう。私は劉さん以上に、あなたに大恩があります。

満洲の廣野で、永らく救け一條の徳の種を埋めて下さったあなたも、今頃は内地の何処かで、勤めはげんで下されていることでしょう。

私は今も尚その御恩を忘れずに、日々勤めております。

（元上海伝道庁長）

### 食後の話題

#### 昭和二十五年、世相あれこれ

★娘の嫁入りに、百円札をベた／貼り付けたマン暮を婚家に持ち込んだという土佐でも、昨今は昔に変わる不景気風。今年も稲作用春肥の配給辞退も出るという変り方に、県庁のお役人もビックリ。また、織物どころの福井、石川県では織機が捨て値で売りに出され、また「富山の万金丹」で名を売った薬屋さんも、運賃値上げや宿泊料値上げなどで行商の遠出もならず、もっぱら近県でお茶をにごすとか。

★ミナト神戸の街から街へ、炭俵を背負ってチリ箱からチリを、紙屑箱専用にあさって

歩く廃品回収業者、ここ数ヶ月前まではあれでなか／い仕事になった。というのは反故紙がすべてセンカ紙の原料に、どん／製紙工場に吸収されていったからだ。

一日歩いて二百円から三百円、昼はオンボロ姿のルンペン君、宵やミ迫ればリユーツとしたリーゼントのあんちゃんに早変わり、映画館へというチャッカリ組もいた。だが、移れば変わる世のならない。センカ景気もようやく峠を過ぎて、近頃はサツパリ金にならぬとか。徒らに紙屑は家々のちり箱に山をなしている。廃品回収業者も変じて浜の風太郎へ。

★知事の許可がなければ、犬猫をはじめ、獣は一切殺せぬという「動物処理などに関する

る條令」が、三重県に生まれるといふ。畜殺の衛生管理が狙いだが、こうなると食用カエルを売る人や、マムシの照焼きで生活している人々には死活問題だ。「これではまるで網吉將軍のお犬様時代の再現だ」と、関係業者が陳情に押しかける騒ぎ。この條令、果たして実施されても、どこまで守られるかが疑問である。

★京都七條署で、交通巡査をしていた上野某（二三）という青年、このほど無届欠勤や素行取まらぬところから免官になったが、巡査の面白さが忘れられず、京都市警へ永田局長を訪ね、海軍ナイフを突きつけて「もう一度、巡査に採用してくれ」と脅迫したがたちまち手錠をガチャリ。

教祖在世当時に活躍した

奈良奉行・川路聖謨が主人公

幕末奈良のドキュメント小説

# まぼらま

作家 出久根達郎 書き下ろし

月刊『陽気』で連載中

特設サイトオープン! 養徳社で検索

定期購読 受付け中

お道の家庭雑誌

# 陽気

◎定期購読の誌代は1冊で半年分…1,600円(送料共) / 1年分…3,200円(送料共)

※ゆうちょ銀行の青い振込用紙をご利用下さい。

(口座番号 00990-3-17694 加入者 養徳社)

希望の号を指定の上、お客様の住所、氏名、電話番号をはっきりご記入お願いします。

問合せ先: ☎ 0120-920-398 養徳社 業務部窓口